

「東日本大震災被災地被災教会で祈りを合わせる旅」に参加させていただいて

羽豆^{はす} 由紀子 (新潟信濃町教会)

月に一度のジュニアチャーチ(教会学校)教師会にて、教師の研修についての協議を続けてきました。そんな中、東日本大震災の被災地を訪ね、私たち教師が見たこと、感じたことを子どもたちに伝えていかななくてはならないのでは…との声が上がりました。行き先を検討する中、この旅のことを知り、早速4名で申し込みをさせていただきました。

私自身、中越地震後、大海に小石を投げ入れるような働きではありましたが、長岡市での支援活動に2年間ほど携わりました。その時に抱えた様々な葛藤や悩みを思い出し、今回の旅への参加に躊躇する思いが出発直前までありました。気仙沼で被災した友人の「今、何をしてほしいか?とよく訊かれるけれど、ただ見に来てくれるだけでいい。ボランティアでなく来るのは躊躇する気持ちがあるかもしれないけれど、被災地の苦しみや頑張りを知ってくれるだけでいい…」との言葉に背中を押されての旅立ちでした。

旅のほとんどの時間、東北の地を、ひたすらバスは走り続け、被害の大きさと範囲の広さを実感する3日間でした。それぞれの場で、教会で、苦しみながらも、復興へと歩んでいる方たちにお目にかかり、祈りを合わせることができました。仙台荒浜では何もなくなってしまった場所に立ち、多くのご遺体がうちあげられたことを伺い、胸が詰まりました。

会津放射能情報センター、石巻YMCA、仙台エマオで出会った青年3人の姿が心に残りました。使命感と責任感を持ち、被災者の方たちと共に歩み続けていることが伝わってきたからです。以前、ジュニアチャーチ教師の研修で映画『奇跡の人』を鑑賞し、主にあるビジョンを持って子どもたちと関わることの大切さを学びました。そのとき「主と共に十字架を担い、仕えていくことができる人を、社会に家庭に送り出していく」とのビジョンが私に与えられました。彼らの姿は、そのことを思い起こさせてくれました。新潟の地で、このような若者を育て送り出していくことが私の担うべき十字架だと再認識し、力をいただきました。

3日間、参加者の私たちに仕え続けてくださった十日町教会の新井純先生、新潟教会の長倉先生に、心から感謝いたします。お二人はじめ教区の皆様が震災直後から被災地を訪ね、救援活動を続けてくださったからこそその旅でした。

同じ新潟市内の方たちでも初めて会う方ばかりで、共に参加させていただいた方たちとの交わりにも豊かな恵みをいただきました。

早速、ジュニアチャーチ教師会で協議し、この旅のことを子どもたちや教会の方々に伝えるときを持ちたいと思っています。

東北の地へ

佐々木 秀子（上尾合同教会）

緊張して出かけた旅でした。11月20日から22日の「東日本大震災被災地被災教会で祈りをあわせる旅」には、秋山徹関東教区総会議長を団長に、総勢29名が参加。新潟からのバスに郡山で合流した私たち埼玉勢は、会津放射能情報センターには行くことができませんでした。バスはその日の宿泊地花巻市へ。

翌日は、宮沢賢治の故郷花巻から遠野市を経て、新生釜石教会での聖書研究、祈祷会に出席しました。会堂に通されて見上げた柱の地上4mあたりに貼られた黄色いテープは、津波の高さを示し、想像を絶するものでした。柳谷雄介牧師によって「主の祈り」からの御言葉を聞き、共に祈りました。被災の状況や現在の心境なども伺いました。

茶菓のもてなしを受けて別れを告げ、仮設の釜石はまゆり飲食店街で昼食。バスは一時間ほどで大船渡教会に着きました。

村谷正人牧師のお話からは、被災当時の混乱ぶりや、ボランティアの人々が大勢かけつけてくれた事、またボランティアを受け入れる側のご苦労も知りました。地域の人々との関わりの中で、埼玉地区の人々によるバザーが大変喜ばれたそうです。

次の宿泊地石巻までは、特に被害の大きかった陸前高田市、気仙沼市を通り、惨状を目の当たりにしたのです。

津波にさらわれて土台だけになった家々の跡。小さな赤い旗があちこちに見られ、それは津波の犠牲者が収容された目印と知らされて胸がつまりました。畔道に4~5本花束のように立てられてあったり、林の中まであり、どんな人がここまで流されたのかと、赤い旗ばかりが霞んで見えました。

三日目は、YMCA石巻支援センターに於いて、伊藤剛士さんが、様々な支援の取り組みを、プロジェクターを使って説明されました。

特に子ども支援では、友達と散り散りにされて仮設住宅などで暮らす子どもへの居場所作り、遊び場作り、学習支援などが大切であり、コミュニティ支援としては、仮設住宅や高齢者施設などでレクリエーションを通しての心身のサポートなど。ワークキャンプは、ヘドロ除去、補修作業、家宅清掃などが主な仕事だそうです。

子ども達の生活の変化にどう対応するか、多感な年齢の中高生に対するアプローチはとても難しいということです。

次に東北教区被災者支援センターエマオから佐藤正史さんがバスに同乗し案内してくださいました。幾つかの仮設住宅を巡り、特に笹屋敷町内会との関わりの中で、人と人とは時間をかけて信頼関係を結び、寄り添うということ、個々のお宅の要望やペースにあわせたスロークと祈りを大切にされているそうです。

エマオでは、ボランティアの人々の為の夕食作りの奉仕を募集中でした。

東日本大震災慰霊の塔が建つ荒浜では、むき出しになった大地と立ち枯れた松林のむこうに穏やかな青い海が光り、荒浜再生の会の人達が願いを込めた黄色いハンカチが、はためいていました。さらに被害の大きかった名取市閑上地区を通って仙台市へ向かいました。

映像で見た夥しい瓦礫の殆どは片づけられており、酷暑、酷暑の中でのご当地の方々やボランティアの方々の苦労が偲ばれました。

ここに住んでいた一人一人にあの日以前の生活があったこと。そして深い傷を貰って散らされていった人々の上に、希望と幸せを祈らずにはおられません。重荷を負った貴方をイエスさまが招いておられる、待っておられると伝えたい、と切に願いました。

当事者でない私に何が理解できるだろうと恐れつつの参加でしたが、ほんとうに祈りの旅でした。更にこの旅は終わることなく、祈り続け関わり続けねばならないと思います。